

フィリピン・東ネグロス州における山間地農業の展開

— 一人の移動過程と農村を取り巻く現状について —

加 川 真 美 *

Agricultural Development in the Uplands of Negros Oriental, Philippines: Processes and Drivers of Migration, Crop Production, and Livelihood Strategies

KAGAWA Mami*

The island of Negros has such vast sugarcane plantations spread across the plains that it is also referred to as “Sugar Land.” Negros is divided in two provinces by mountains. Nearly 80% of Negros Oriental is considered upland, where upland farming has been carried out by migrant farmers since the 19th century.

The purpose of this study is to clarify the process of migration to the upland, to characterize farmers, lifestyle and to describe changes in agriculture. First, I present a brief history of development in Negros, highlighting the factors and processes leading to the creation of large tracts of plantation and at the same time migration and landlessness. This includes factors in the delay of land reform on the plains, and farmers’ cultivation of the upland areas. Next, I describe farming practices in the upland areas of Negros Oriental from monoculture to mixed cropping. Lastly, I compare three selected upland villages with different backgrounds. Basically, farmers in the villages began with subsistence farming, and later moved on to cultivation of cash crops following progress in logistics and market access. Agricultural development and related changes can be attributed significantly to agricultural projects implemented in the area, as well as changes in villagers’ sources of income.

Compared to the lowland plains, there are many constraints to agricultural production in the uplands, but farmers were able to adapt. Farmers combined subsistence farming, cultivation of cash crops and off-farm sources of income, resulting in a mixed-type of agriculture in terms of crops, farming practices and capital intensity. The findings from this study show an important perspective for developing upland agriculture in this and other upland areas in the Philippines.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2011年5月6日受付, 2011年10月25日受理

1. はじめに

フィリピンのルソン島とミンダナオ島に挟まれたビサヤ地方は、数多くの島々からなる多島海である（図 1）。この地方は島の移動を繰り返す海洋性民族の生活圏であるが [関 2003, 2007]、島間や、沿岸部と内陸部には、自然環境や歴史に大きな変異がある。スペインの世界貿易に巻き込まれる以前のビサヤ地方は、島々の沿岸部を中心とした半農半漁の生活が展開していたと考えられる。その一方、急峻な山々が連なる島の内陸部は、海へのアクセスが悪く、外部世界との交流が閉ざされがちな貧しい場所で、ビサヤ山間地の生活を扱った文献も貧困をテーマにしたものが多い [Cadelina 1986]。筆者が調査を始めた 1998 年頃も、沿岸部住民は、山間地を貧しく開発の遅れたところとみなしていた。

このような対比は、ルソン島内陸部のように棚田を中心とした独自の山間地文化が開花・発達した島とは大きく状況が異なっている。ビサヤ内海に住む人々の生活様式は、東南アジア島嶼部のそれと類似した海洋世界と位置づけてよい [関 2007]。ビサヤ地方では、かつて他の東南アジア島嶼部がそうであったように、島内部の森林を猖獗の地として遠ざけ、海と海岸地域を舞台に半農半漁の生業を発達させてきた。だが、沿岸部に新たな開拓地が消失していくなかで、山間地はビサヤ住民に残された希少な環境資源となり、近年になってその開発が急速にすすめられていった。

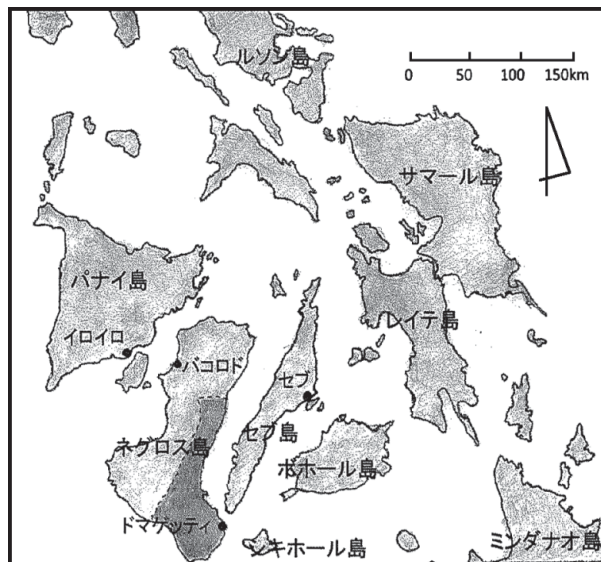


図 1 ビサヤ地方
出所：筆者作成。

ビサヤ地方の南西部に位置するネグロス島には、北に標高2,465 mのカンラオン火山 (Kanlaon Volcano) と南に標高1,904 mのタリニス山という2つの大きな火山・休火山¹⁾があり、この2つをつなぐ山脈が島を東西に分け、行政的にもドマゲッティを州都とする東ネグロス州とバコロドを州都とする西ネグロス州に区分している。東ネグロス州では、東隣にあるセブ島と同じセブアノ語が話され、同様のセブアノ語圏であるシキホール島、ボホール島、レイテ島とともに中ビサヤ地方に属する。「セブアノ」には、「セブ島を中心とした中ビサヤのリングフランカであるセブの言葉」と、「セブアノ語を話すビサヤの人々」という2つの意味がある。西ネグロス州では北隣にあるパナイ島などと同じヒリガイノン語 (イロンゴ語) が話され、西ビサヤ地区に属している。ひとつの島でありながら、山脈が境界となって言語も行政区も異なっている。

東ネグロス州と西ネグロス州の面積はほぼ同じであるが、東ネグロス州の面積の8割近くを山間部や丘陵地が占め (図2)、2007年の人口統計によれば、東ネグロス州の人口は1,286,100

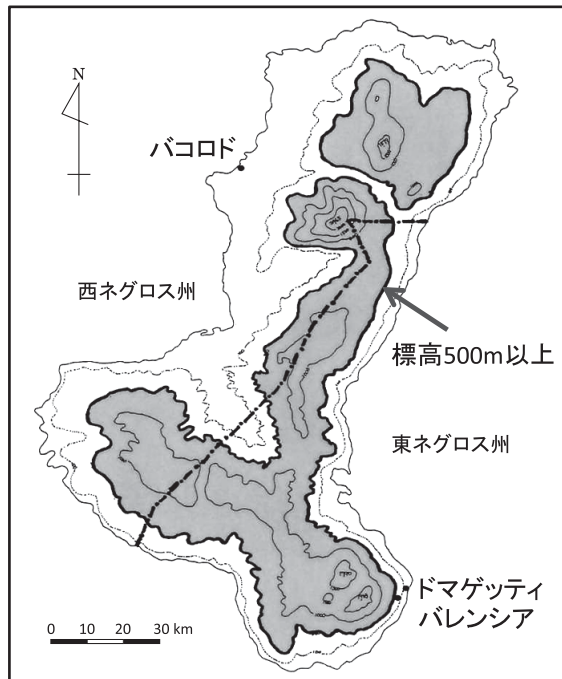


図2 ネグロス島
出所：筆者作成

1) カンラオン火山は、活火山で、時おり小規模な火山活動がみられる。タリニス山 (Mt. Talinis) は休火山で、*talinis* とはセブアノ語で「尖った」という意味である。2つの大きな山頂から Cuernos de Negros (ネグロスの角) という別名をもち、中腹より山頂にかけては急峻な斜面をなす。

人で、西ネグロス州 (2,370,269 人) の 54% にすぎない。島の山間地に低地のカトリック農民が入植していったのは 19 世紀になってからである。

平野部には「アシエンダ」と呼ばれる大土地所有制によって広大なサトウキビ・プランテーションが広がるため、ネグロス島は“Sugar Land”の異名をもっている。1980 年代半ばに砂糖の価格が急落し、地主が労働者への賃金を払わなかったことで労働者が飢餓におちいったことはよく知られている。アシエンダで働く労働者の人権を守るため、ユニセフをはじめ日本を含む多くの NGO が農業労働者の抗議運動に加担するようになった。当時は東ネグロス州だけでも、政府に登録されている NGO は 300 を超えていた。そのためネグロス島における産業や農業に関する研究・報告も糖業を中心としたものが多く [永野 1986, 1990]、それ以外の農業に関する研究は限られている。

近年、州政府は山間地農村の貧困対策に力を入れるようになってきたが、州の担当部署も山間地農村の実態を正確に捉えていないのが現状である [Provincial Planning and Development Office 2008]。

そこで本稿では、ネグロス島東ネグロス州において海洋の民が山間地に入植・定着していくプロセスを、フィリピンを取りまく政治・経済の歴史的展開に照らしながら分析するとともに、将来に向けた課題について考察する。

海岸低地におけるプランテーション化の進展や農地解放の遅れなどといった政治・経済的な動きが、山間地開拓の動向に強く影響しているため、本稿ではまずネグロス島の開拓過程に関する小史を示し、そのうえで東ネグロス州の山間地農業の概要を説明する。そして、低地から山間地へ農民が入植していった過程と農村の現状および農業に生じた変化について、山間地の 3 つの農村の事例を紹介する。この 3 村は、それぞれ異なる入植の歴史的な背景をもち、山間地農村の形成様式を分類したときの、各類型の代表的な事例として取り上げた。そしてそれら 3 村の比較研究を通して、今までネグロス島の代名詞となってきた“Sugar Land”という一面的な理解から脱し、平野部の状況によって変化する山間地農業について論じる。

2. 調査方法と調査期間

調査は 1998 年 9 月から 1999 年 10 月、2009 年 1 月から 3 月、2010 年の 1 月から 3 月に東ネグロス州の山間地農村 (A 村、B 村、C 村) で実施した。各村の成り立ちや人口などの基礎情報については主にバランガイ・プロフィール (*Barnngay profail*) と聞き取りから得た (写真 1)。バランガイ・プロフィールとは個々の村 (バランガイ) が作成する、人口や土地、産業などに関する基礎データ・ファイルであるが、村ごとに、またつくられた時期によって項目が統一されていないという難点がある。また農業については、A 村では耕地の実測や、地積簿と質問票を用いた聞き取りをおこなった。B 村からは地積簿と質問票を用いた聞き取りから情

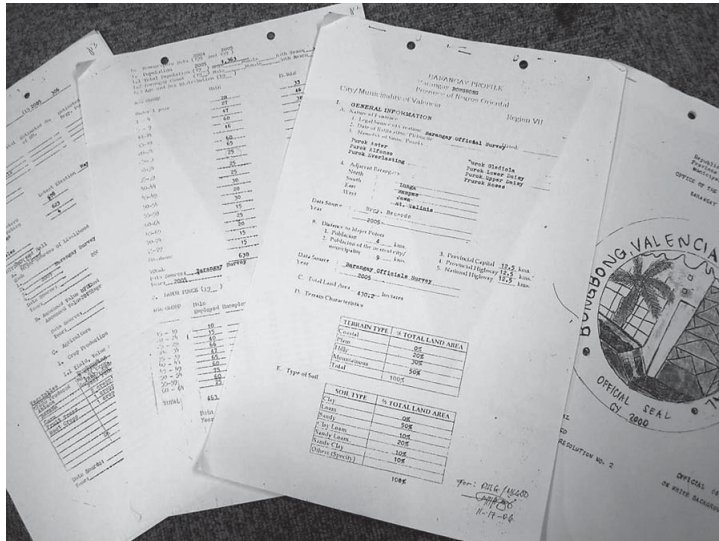


写真1 バランガイ・プロフィール

報を得た。C村に関しては、新人民軍（NPA）と政府軍が対立するなかで戦場と化した時期があり、政治的な理由から正確なバランガイ・プロフィールが作成されておらず、一部の情報が欠落している。C村はA村やB村に比べ、開拓されてからの日が浅く、現在も人口流入や違法焼畑が繰り返されており、村の境界も明確ではない。しかし、C村の形成プロセスは山間地農村の重要な類型のひとつであるため、あえてC村の事例を取り上げた。そのため、C村に関するデータは観察と主にバランガイ・キャプテン（村長）やバレンシア町役場からの聞き取りによる。

1990年までの歴史や農業の変遷に関しては先行文献や統計資料から情報を得た。関連する先行研究は数が少ないが、半世紀以上前の自給的トウモロコシ栽培についての農村経済の研究 [Arnaldo 1954] や、1970年代に山間地に分け入って定着した農民の住居や農業に関する人類学的研究 [Hoffman 1982]、山間地の居留地に定住化させられたネグрито族が抱える問題²⁾ [Cadelina 1985: 1-7; Olasion 1985: 17]、山間地での紛争問題 [山本 1991]、山間地における混作と地力維持に関する研究 [Wollenberg 1991]、水源涵養林の維持に関する報告書 [Rosario 1999]、紛争により空白化した山間地奥部での再定住プロジェクトに関する報告書 [海外農業開発コンサルタント協会 2003]、山間地入植プロセスや農業・生活に関する研究 [Hoffman 1982; Wollenberg 1991]などを参照しながら、東ネグロス州山間地における農業と生活の

2) 低地カトリック民の入植によって圧倒的に少数派となった先住民ネグрито族は、森林伐採がすすむなか、州政府によって山間奥地に残った森林につくられた保護区に移住させられ、制限された生活を強いられている。また現在ではネグрито族の一部は低地に下り、低地カトリック民と労働や婚姻を通じて同化しつつある。

変遷を多角的に捉えた。

そして、先行研究によって扱われてこなかった 1990 年以降の変化については、筆者が 10 年以上にわたる現地観察、州役場や農地解放のための NGO と農民へのセブアノ語による聞き取りによって得た情報をもとにまとめた。森のなかで狩猟採集をおこなっていたネグリト族（アエタとも呼ばれる）も山間地民と呼ぶべきだが、本稿では低地カトリック民で山間地に移入して農地を拓いた者だけを山間地農民と呼ぶことにする。

3. ネグロス島小史

ネグロス島はかつて Buglas と呼ばれ深い森に覆われていた。1565 年に、ヨーロッパ人としては初めて、レガスピが率いるスペイン人たちがネグロスを訪れた。当時、住居は沿岸部にわずかに散在するだけだった。スペイン統治時代に、ネグロス島の森林内にネグリトと呼ばれる民族が居住しているとされ、ネグロス島と呼ばれるようになった。その後ネグロス島はセブ島にあるスペイン統治政府の管理下に置かれた。

1743 年になってネグロス島は、行政的に独立した地域として認められた。その当時も低地カトリック住民の多くは、依然として沿岸部に居住するのみであった。1850 年代ははじめになって、ネグロスの東海岸には東方にあるセブ島、ボホール島、シキホール島（図 1）など、セブアノ語を話す地域から人々が移住してきた [Sitoy 1993]。当時、セブ島では統治政府によって、スペインの貿易船に食糧を供給するためのトウモロコシ栽培がすすめられていた。トウモロコシ栽培は住民の間に広まり、可耕地の限界まで栽培されるようになっていた。そして、セブ島に耕す土地をもてなかった人々が新たな耕地を求めてネグロス島に移住するようになっていったのである [VanderMeer 1962]。セブ島では、この頃の焼畑によって生じた土壌浸食が問題となっている [Fernholz 1998]。

一方、ネグロス島の南部地域に居住した初期のカトリック住民は、長い間ミンダナオ島やホロ諸島のモスリムの海賊行為に悩まされていた。19 世紀になってから、低地カトリック住民は海賊の襲撃を避けるために沿岸部から山間地へ入っていった [Hoffman 1982]。

19 世紀半ば以降、サトウキビ栽培がイギリス人によって西ネグロス州に導入された。その後、スペイン系や華人とのメスティーツなど、資本力のある者によって島の平野部の土地が次々と買い占められ、アシエンダと呼ばれる大土地所有制が広まっていった。1855 年にネグロス島の北方のパナイ島のイロイロ港（図 1）が貿易港として開港して海外の繊維が輸入されるようになると、パナイ島の伝統的な繊維産業は衰退していった。1860 年代には職を失ったパナイ島民がサトウキビ・プランテーションの労働者としてネグロス島の西海岸に渡ってきた [永野 1990]。その後、ネグロス島の平野部では全域にサトウキビ・プランテーションが拡大していった。

ネグロス島は、東海岸と西海岸では言語も民族の出自も異なっていたため、1890年に西ネグロス州と東ネグロス州に分けられた。

地主たちはかなり強引な手段でプランテーションの土地を獲得していった。彼らは、平野部にあるスペインの王領地や住民たちが慣行的に耕作していた土地を横領したり、土地登記の意味をよく分かっていなかった小農の農地や屋敷地をだまし取ったり、借金の代わりに土地を取り上げたり、土地を囲い込んだり、脅したりして農民たちを追い出した例³⁾も少なくなかったという [永野 1990: 45-53]。フィリピンでは、東南アジア諸国に先駆けて1927年に土地登記法が制定された。当時は、法律が成立したことすら知らない農民や、英文の登記書類を読めない農民や法律の内容を理解できない農民がほとんどであった。そういった農民たちの一部は農業労働者となるか、あるいは地主の支配が及ばない山間地に農地を求めて移住するようになっていった。

また、太平洋戦争も平野部から山中へ人が移り住む要因となった。大東亜共栄圏の拡大とともにフィリピンは1942年に日本の支配下に置かれた。現在の東ネグロス州の州都ドマゲッティにも作戦司令部が置かれ日本軍の強権的な振る舞いから逃れるため [Aldecoa-Rodriguez 2001: 136-137]、平野部の住民の多くが山間地に逃げ込んだといわれている。そして逃げ込んだ先の山間地の森に畑を拓いて村をつくっていった。

サトウキビ栽培は戦争で衰退していたが、戦後、再び盛んになった。サトウキビは刈り取り後24時間以内に搾汁する必要があるため、自ずとプランテーションの展開する場所は、生産効率が高い、製糖工場までアクセスしやすい平野部や丘陵地に限られた。1950年代後半では、アシエンダの農業労働者の年収は、山間地でトウモロコシ栽培に従事していた自作農民の2倍近くあり、サトウキビ農園の労働者の方が山間地農民よりも生活水準は高かったといわれている [Gervacio 1959]。事実、1972年までは砂糖の輸出価格も好調で、サトウキビ産業には活気があった。フィリピンにアメリカ合衆国が基地を設置することの見返りに、フィリピン産砂糖に対し1974年まで輸出関税特恵をもうけていたためである。

アシエンダの初期には、地主は労働力の獲得に苦勞していたため常勤雇用が一般的であったが、やがて労働者が増加してくると、サカダと呼ばれる季節雇用者が増加していった。サカダは刈り取りと植え付け時期だけ雇われ、それ以外の数ヶ月間は収入がまったくなく、農閑期は死の季節と呼ばれていた [Berlow 1996]。サカダのなかには、家族の食料を確保するために山へ向かう者が現れ始めた。その背景には、戦後1950年から1970年におこなわれた天然林の商業伐採がある。フィリピンの他の地域と同様に、東ネグロス州でも政府により民間企業に伐採権が売却されたため、この時期に森林面積は州域の40%にまで減少した (図3)。現在は、

3) レイテ島で起こった、サトウキビ園主による農民の土地の収奪が山間地まで及んだ事例に関しては [加藤 1998] が詳細に報告している。

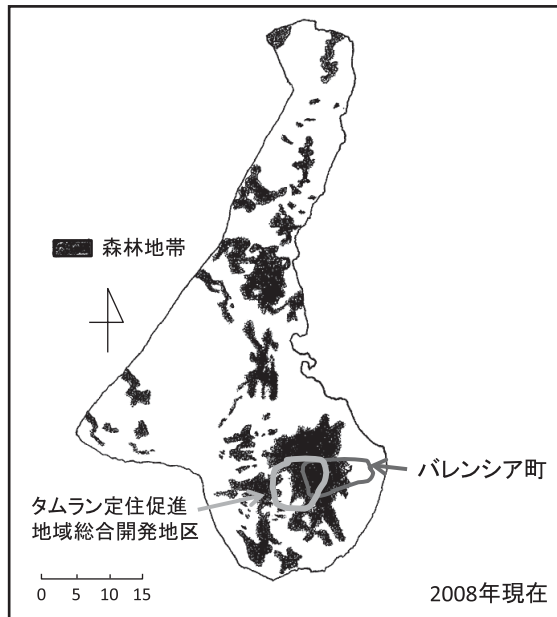


図3 東ネグロス州の森林地帯

政府により新たな天然林の伐採が禁止されているものの、依然として草地化したままの場所もある。伐採跡地の一部は水源涵養地区に指定され、1980年以後は政府や民間企業を主体とした植林プロジェクトがおこなわれている [Rosario 1999]。

伐採跡地の多くは1950年より政府によって地主や入植者に安価で売却された。その入植者の主体はサカダなどの東ネグロス州の農業労働者やセブ島から移住してきた低地カトリック民であった [Hoffman 1982: 53-84]。入植者たちはカインギン (*kaingin*) と呼ばれる焼畑耕作によって山間地を農地化していった。カインギンは、輪作技術をもたない農民が開墾の手段として実施することが多い。利用した土地の用益権が保障されていないので、地力が低下すると数年で畑を放棄し、新たな森や草地に焼畑を拓いていった。現在ではカインギンは法律によって禁止されている。

1980年頃から砂糖の国際価格が下落し始めた。フィリピンは関税特惠を失っただけでなく、国際市場におけるテンサイ糖の供給量が増加し、また人工甘味料も普及したことで、フィリピン産砂糖の需要が激減したからである。そのため耕地面積に占めるサトウキビ園の割合も下がっていった。収穫すらされない農園もあったため、地主による農業労働者への賃金の不払いによって労働者の生活は著しく低下していった。とりわけ仕事があるときのみ給与が支払われるサカダの生活は劣悪で、1985年には餓死者も出るほどであった。一般的にアシエンダでは、労働者は自給用の畑をつくるのが制限され、食料品は労働者頭 (カボ) の店からツケで買う

ように強要されることが多かった [永野 1990: 245-252; 山本 1991].

1994年には砂糖の国際価格が大幅に下落し（第2次砂糖危機）、1994年の砂糖の輸出量は1984年の20.7%、輸出金額では16.3%しかなかった [National Statistics Office 1996]. その生産調整のためにフィリピンの砂糖の輸出量は大きく減少した。一時は国内の砂糖の消費量さえ賄えないほど砂糖の生産は減少し [LMC 2010]、製糖工場の倒産があいついだ。

フィリピンにおける極端な貧富の差は社会的不条理に対する反対運動を招来し、1980年代後半には武力衝突も生じた。とくにネグロス島のような社会的軋轢の大きい社会では運動も激しかった。一方で、政府や地主側は軍隊や警察、私兵によって地主に反発する者の弾圧をはかった。政府側は、武装した左派勢力である新人民軍（NPA）の拠点が山間地の奥部にあると考えるようになり、山間地農民が新人民軍を支持していると一方的に決めつけた。アキノ政権は1987年に左派の武装勢力に対しトータルウォーという全面戦争を宣言し、ネグロス島南部の山中を陸と空から攻撃した。その結果、山間地の農民は村を追われて国内難民となり [山本 1991: 77-103]、ネグロス南部の山間地の奥部は一時的に人口が極端に減少し、ほぼ無人とっていい状態になってしまった。

その一方で、いきすぎたフィリピンの土地所有の偏りを是正するため、1988年にアキノ政権下で包括的農地解放令が施行された。この法令はあまりにも多くの抜け道を抱えており、実効性が弱く、何度も改正され現在に至っている。その後の包括的農地改革支援プログラムの実施により土地配分を受けた農業労働者が徐々に小農となる例がみられるようになったものの、農地解放により農民に分配された土地は2002年までの総計でもまだ7,962 haにすぎなかった。これは東ネグロス州における解放予定農地のわずか3.5%にすぎない [National Statistics Office 2002]. 農地解放の進展は平野部の大部分を占めるアシエンダにおいてはさらに厳しい状況で [日本ネグロス・キャンペーン委員会 2000a]、農地解放が遅々として進まないだけでなく、農地分配の対象となった農民がサトウキビをつくる以外の農業技術や農家経営のすべもたなかったために、借金の返済に追われ、手に入れた農地を再び地主に奪い返されるという事態も生じている [大河原 2007].

東ネグロス州の担当者やNGO関係者の聞き取りによれば、農地解放はかつてサトウキビの国際価格が下落したときに、銀行が抵当として差し押さえた土地を政府が買い取ることで進んでいったが、払い下げられた土地の多くはサトウキビ園としては条件の劣る丘陵部であった。運良く灌漑可能な平野部の土地を得ることができた者が水田化に成功した例を散見するが、灌漑施設がない土地を得た者は自給用のトウモロコシやイモ類を栽培するしかなかった。また、土地を得ても、サトウキビ栽培を続けている者は少なくない。教育や医療などに現金が不可欠な現代社会のなかで、サトウキビは数少ない現金収入源となっているのである [日本ネグロス・キャンペーン委員会 2000b].

現在でも地主と農業労働者の間には、農地改革をめぐる係争がたえない。地主は農業労働者に土地権利書を発行しないことも多く、農地解放を求める農民がつくった協同組合に、私兵をもって暴力的なハラスメントをおこない排斥しようとする例は枚挙にいとまがない。また、地主が農地をサトウキビからマンゴーなどの特別輸出作物に植え替えることで農地解放から逃れる例もある。そのため、平野部の土地をあきらめた農業労働者も多く、そうした者たちが山間地の開拓に向かうようになった。

2003 年、州政府は新人民軍 (NPA) と和解し、内戦によって空白化した山間地奥部への定住を促していった。その結果、多くの農業労働者が山間地に流れ込んできた。州政府が実施したこの *Balik Bukid* (山へ帰ろう) 計画は、和解したといえども新人民軍の影響が強い状況下では実効性を欠いていた。2008 年には、州政府が中心になって ODA など海外からの支援を取り付けながら、政府が道路の敷設や学校の建設、灌漑や給水施設の普及、保健サービスを盛り込んだ東ネグロス州タムラン溪谷定住促進地域総合開発 (図 3) を開始した。これは国内難民となった者を中心に、山間地に移住しようとする者に対して土地の用益権を認め農民の定住化を図る試みである [Provincial Planning and Development Office 2008]。このようにネグロス島では、19 世紀に地主の支配を逃れて始まった山間地への移住は、政府による定住化事業によって、21 世紀になってようやく正規の入植として認められるようになったのである。

4. 山間地の農業

東ネグロス州では 1991 年から 2002 年の間に農家場数は 107,854 カ所から 113,999 カ所へと漸増し、農地面積も 214,461 ha から 228,447 ha へと増加している [National Statistics Office 1991, 2002]。1991 年までに平野部のほとんどはサトウキビ・プランテーションとして開拓され尽くしており、農地面積の増加分の大半は山間地を切り拓くことによって増えたと考えるのが妥当である。

ネグロス島の気候は熱帯モンスーン気候であり、東海岸での乾季は 4 月および 5 月であるが、それ以外の月は毎月雨が降る。東ネグロス州では西ネグロス州に比べ、乾季がやや短く不明瞭である [梅原 1983: 43-49]。東ネグロス州は降雨量も豊富で、火山灰土壌に覆われた地味豊かな土地が多い。だが、傾斜地には棚田はみられず、陸稲の栽培もまれである。山間地農民の多くがトウモロコシを基幹作物とするセブ島出身者であり [Wernsted 1954: 59-67]、稲作に馴染みがないためだと思われる。セブ島は降雨量が少なく、地味が石灰岩質で稲作に適さないため、イネより乾燥に強いトウモロコシの栽培に特化している。東ネグロス州で広く栽培されているのは、彼らが主食としている白色のモチ性トウモロコシであった。⁴⁾

4) 1981 年に発布されたマイサガナ計画では、飼料用のイエローコーンの栽培が振興された [梅原 1992: 392-422] が、東ネグロス州で栽培されているのはこれとは異なる「在来種」である。

それ以外に東ネグロス州の山間地の農業を特徴づけているのは、イモ、バナナからなるサラゴン (*salagon*) とココヤシである。サラゴンとは、セブアノ語でイモ類 (タロイモ、アメリカサトイモ、ヤムイモ、サツマイモ、キャッサバ) とバナナ (7品種のフルーツバナナと2品種の料理用バナナ) を指す総称である。サラゴンは東ネグロス州で広くみられ、とくにイモの栽培面積は西ネグロス州の3倍近い。サラゴンは長い間、東ネグロス州の山間地において主要な自給作物であった。とくにタロイモは新年や万聖節などの儀礼に欠かせないものとして文化的価値も有している。そこにはオセアニアから南西諸島に連なるタロイモ文化圏 [橋本 2002] の強い影響を感じる。これは、稲作の大きな影響を受けたルソン島などとは異なり、漁業に強く依存することで、手間のかからない作物を選択してきたセブアノ海洋民族の生活様式と深く関連した文化的特徴ではないかと筆者は考えている。梅原 [1992b] は、フィリピンでは根菜を中心とする栄養体作物が農耕の中心であったが、それが陸稲栽培を経て水稻栽培に変わったとしながら、乾燥したセブ島を中心にしたビサヤではトウモロコシが伝来するまで変化はみられなかったと述べている。筆者はトウモロコシが伝来した後も、セブアノの地域には栄養体作物を中心とする文化の影響がフィリピンの他の場所より色濃く残ったと考えている。今でも貧しい世帯においては、サラゴンに小魚の塩辛や干し魚を添える食事が基本であり、山間地に移住してもその食習慣が残っているのであろう。

2000年代当初までの食生活は、このサラゴンと、スペイン統治下のもとで栽培が強制され定着したトウモロコシを基本としていた。収穫後の保存があまりきかないサラゴンに対し、貯蔵性の高いトウモロコシはスペイン人の到来以来、政庁や教会への租税・貢納とし、煮るだけのトウモロコシは消化が悪いが、そのことでかえって腹持ちのよい食物として好まれるようになった。⁵⁾ しかし最近になって現金収入が安定してくると、調理が簡便で、おいしく、消化吸収がよい米飯が好まれるようになり、トウモロコシの自給作物としての価値は下がりつつある。だが、稲作に関しては陸稲を含め山間地ではほとんど栽培されていない。前でも述べたように、稲作や米食の食習慣がかつてなかったためだと思われる。ごく最近になってコメの味を覚えたあとも稲作へ関心が薄いのは、流通が発達した現在では、技術や知識を要する稲作を習得するよりも、他の作物などの販売から得た収入でコメを買う方がはるかに楽だからではないかと筆者は推測している。

また、一般的にフィリピンでは雨量の多い東海岸でココヤシ栽培が卓越する [古川 1997: 482-483] が、それは東ネグロス州も例外ではない。筆者の観察では、東海岸に面した山間地の山裾や丘陵地の斜面は一面のココヤシで覆われていた。ココヤシ林の林床にはトウモロコシなどの自給作物や他の商品作物が植えられるか、あるいはココヤシが他の作物の畑を縁取るよ

5) 現在では、糖尿病に悩む人が増えたため、トウモロコシの消化・吸収の遅さがコメに比べ体に良いと好む人も出てきた。

うに植栽されていた。このようなココヤシを含む混作形態が東ネグロス州の山間地農業の大きな特徴となっている（写真 2）。農村に住み込んで観察したところ、村人の生活には、ココヤシはコプラを収穫するだけでなく、ヤシ殻炭、葉身からつくる屋根材、燃料としての葉柄、ヤシ酒、ヤシ酢など多目的に利用され、住民の生活にとってきわめて重要な作物となっていることが分かった。とくに多くの天然林が消失した東ネグロスの山間地において、燃料材としてココヤシの葉柄は重要な役割を担ってきた。それは貧しい世帯においては今も変わらない。ヤシの果汁は遠方から来た客人のもてなしには欠かせないなど、ココヤシは社会的・文化的な価値も付帯しているのである。

東ネグロス州の山間地における小農の家の周囲にはホームガーデンが発達していることが多い。Wollenberg [1991] が 1990 年に東ネグロス州の山間地にある 193 のホームガーデンでおこなった調査によると、ホームガーデンの平均面積は 0.07 ha で、バナナ（出現頻度 63%）、花卉（同 67%）、ココヤシ（同 63%）を中心として、ジャックフルーツなどの果樹や野菜、コーヒーなどを組み合わせていた。標高が高くなるにつれて混作する作物種が増え、構成が複雑になる傾向がある。筆者が調査したあるホームガーデンでは 15 種類の植物を育て、そのなかで 5 種類の家畜と家畜を飼育していた。最も多い園地では、葉草を含めると 25 種類の植物を確認した。多くの農家ではホームガーデンに加えて、自給用トウモロコシや、ココヤシやアバカ⁶⁾などの輸出用商品作物、地元市場に向けたさまざまな野菜、果樹などの畑を組み合わせて営農していた（図 4）。トウモロコシやサラゴンの大部分は自家消費するが、余剰分は地元



写真 2 ココヤシ林のなかでの耕作

6) 学名は *Musa textilis* であり、1930 年代頃から輸出商品作物として注目されてきた。

市場で売却している。

アバカとはマニラ麻のことで、バショウ科の硬質繊維がとれる植物である。水はけの良い火山灰土壌を好むため、東ネグロス州などの火山からなる山間地の土壌にはうってつけの作物である。マニラ麻は19世紀初頭からロープとしての需要が高まり、輸出向けに生産してきたが、戦後は化学繊維の登場によって生産が一時減少した。最近では日本紙幣といった特殊紙の原料として、また天然繊維、自然素材の調度品の原料として需要が見直されている。アバカは、とくに勾配がきつすぎて他の作物が育たない山間地上部の村にとっては今でも貴重な換金作物でありつづけている。

山間地農民によると、東ネグロス州でココヤシ栽培が盛んになったのは、先進国で石鹼やマーガリンなどの食用油脂の原料としてココヤシ油が使われるようになった1960年代以降である。戦後、フィリピン全土においてココヤシの作付けが増加し始めた。1970年代のはじめには、「ココヤシブーム」がフィリピンを席卷した。1980年代に入ると全国的にココヤシの作付け面積や生産量が停滞したが、それは東ネグロス州でも同様であった [Romero 2008]。マレーシアなどで増加したオイルパームに世界的な需要がシフトしたためだと思われる。

タロイモの葉柄（ズイキ）やサツマイモの茎葉などに加えて、1950年頃からペッツァイと呼ばれる白菜の一種を栽培するようになった。タイサイの仲間であり、名前からも分かるように、この野菜の普及には華人の影響が大きい。1980年代以降にキャベツなどの高原野菜の普及活動もみられたが、当初は種子や農薬に費用がかかる資本集約的な農業に取り組める農家は限られていた。

近年では、ダイコンやニンジン、インゲンマメ、ナガササゲ、キュウリ、ネギ、ニガウリ、

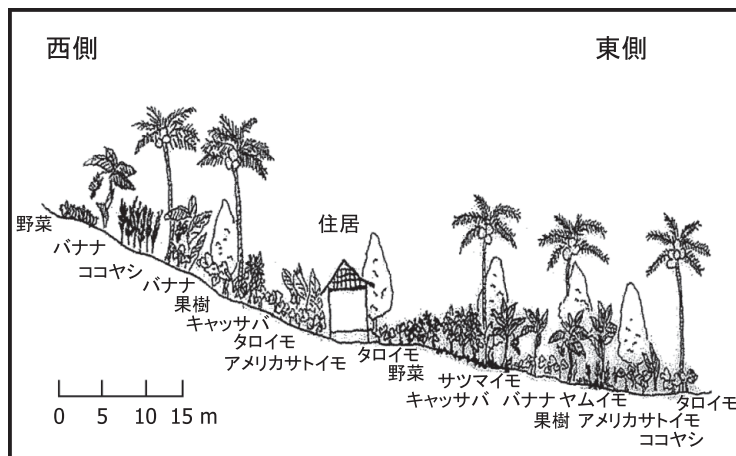


図4 ホームガーデンの例 (A村の事例)

出所：1999年筆者作成。

ハヤトウリ、カボチャなど、都市向けの生鮮野菜の栽培に取り組む地域も増えてきた。

近年の自給作物から商品作物への移行は、東ネグロスの山間地で広くみられる現象である。商品作物の栽培はココヤシやアバカなどの輸出向け作物から始まったが、最近になって、野菜や果樹といった国内もしくは地方都市向けの商品作物に転換しつつある。

5. 現地村落の調査の対象地

東ネグロス州の山間地への入植過程には大きく3つのパターン、つまりセブ島からの土地無し農民の移住、太平洋戦争時における戦火からの避難、戦後の商業伐採跡地への入植がある。各パターンを詳細に把握するために、ドマゲッティ市の西側に隣接するバレンシア町を構成する25の村から3つの村を選び重点的な調査を実施した(図5)。これらの村は単に歴史過程を追うだけでなく、村落形成を支えた諸条件によって類別・選定した。

バレンシア町はタリニス山の中腹を含んでいるため町内の標高差が170~1,900 mと非常に大きく、また町内は長い尾根によって東斜面と西斜面に分かれていて、村の立地による地域差が大きい。

バレンシア町の面積は13,893 haで、その半分近くを森林地帯が占めている。人口は1998年の統計では20,147人であったが、2008年には28,478人に増加していて、東ネグロス州のなかでも人口増加率が高い地域である。自然増加というよりはむしろ他所からの移入者の増加が大きい。そのほとんどはタリニス山の東斜面にある24の村に住んでいる(写真3)。

バレンシア町の歴史は、19世紀以前にさかのぼるが、入植当初の公式な記録はない。19世紀にバレンシア町に移り住んだスペイン人牧師によってヌエバ・バレンシアと呼ばれるように

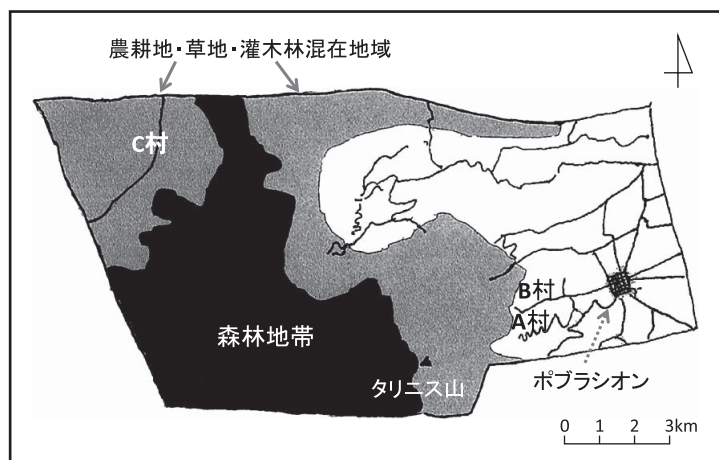


図5 バレンシア町における調査村の位置

なり、1904年にバレンシアと名が改められた [Valencia Municipio Office 1998]。バレンシア町とドマゲッティ市の結びつきは強く、東斜面の村々からドマゲッティ市に通勤、通学している者も少なくない。1997年になって町の中心のポブラシオン（図5）まで電話が通じるようになる、涼しくて快適な環境を求めて都市民がポブラシオンに移り住むようになっていった。現在では、東斜面の大半の地域で携帯電話が使用でき、バイクを所有する世帯も多いことから、都市と東斜面の村々との結びつきはさらに強まり、交通の便が良いところはドマゲッティ市（写真4）⁷⁾の通勤圏に含まれつつある。最近ではインターネットも通じるようになり、バレンシア町のポブラシオンは貧しい山間地の町から都市郊外へと位置づけが変わっていった。こうした展開は、筆者が調査を開始した1998年には予想もできなかったことである。

タリニス山は休火山であり、1983年には日本のODAによって町域に地熱発電所が建てられた。当初、電力を供給する対象は、ネグロス島南部にあるさまざまなNGOが公害汚染や労働者の人権問題を指摘していたマリカム銅山だけであったが、新人民軍などのゲリラ活動により電線が切断されたため送電が不可能となった。今では海底ケーブルによってドマゲッティ市街だけでなく、セブ島にまで送電している。1991年に地方分権化法が成立して以来、この企業からの税金（一種の公害税）がバレンシア町に直接もたらされるようになったため、今では町の財政の多くをこの税金に頼っている。2003年以降、町長の裁量でさまざまな貧困対策や農業改革の試みがなされてきたが、その資金の大半はこの税金によって賄われてきた。



写真3 タリニス山とバレンシア町の東側斜面の村（バレンシア町提供）

7) 近年ドマゲッティ市は急速に発展し、庶民の足である7人乗りのベディキャブと呼ばれるバイクタクシーや自家用バイクであふれかえっている。バレンシア町民はポブラシオンとドマゲッティ市の間を頻繁に走るジープニー（乗合バス）と町内を走るベディキャブを乗り継ぐか、自家用バイクなどによって通勤している。



写真4 ドماجetti市の様子
ペディキャブは庶民の足である。

調査村の A 村と B 村は、東斜面にある 24 の村のうち、高所に分布する 5 つの村に含まれている。この 5 つの村はタリニス山の尾根上の、標高 400 m 以上のところにある。この地域の耕作限界は 800~1,100 m で、標高 1,100 m 以上になると山は斜度を増し、住む者も農地を拓く者もまれである。1,400 m になると傾斜はさらにきつくなり、人が踏み込むことすら難しく、そこから上層には天然林が広がっている。5 つの村は地図上では隣接しているようにみえるが、それぞれが異なった尾根上に存在し、尾根の間の深い溪谷（ドライクリーク）が村どうしの往来を阻んでいる。そのため 5 つの村は開拓された年代や、主要な農産物にも違いがみられる。その違いは自給作物で小さく、商品作物で大きい。

最後の調査村である C 村は西側斜面にある唯一の村である。東斜面の村々とは急峻で無人の森林地帯で遮られた、標高 500 m 程度の丘陵地帯にある。ポブラシオンから西側斜面に出るには、現在でもバレンシア町以外の 2 つの市と 4 つの町を迂回していくしか方法がなく、道路が建設される 2008 年までは川で寸断され、乗り物が通ることもできず、同じ村でありながら東側斜面とは隔絶された場所であった。

6. 各村の調査結果

ここからは調査に基づいて山間地に農民が移入していった過程と、開拓から経た年数や村に残る森林、都市からのアクセス、農業プロジェクトや行政の介入と、それが村の現状や農業に与えた影響について説明する。栽培されている作物の一覧を、A 村の balan-gai・プロフィール（表 1）と、B 村の農民組合の 53 名へのアンケートから得たデータで示す（表 2）。表 1 と

表1 A村全体の主な商品作物（バラングイ・プロファイルより）

品目	1年の収穫回数	1年あたりの収量	1年あたりの収入
果樹	1回	25,000 kg	375,000 ペソ
バナナ	周年	70,000 kg	369,000 ペソ
野菜	周年	420,000 kg	360,000 ペソ
ココヤシ	4回	25,000 kg	250,000 ペソ
アバカ	1回	25,000 kg	250,000 ペソ
トウモロコシ	2回	11,000 kg	57,000 ペソ
イモ類	周年	10,000 kg	50,000 ペソ

1 ペソ＝約 2 円（2009 年現在）

* 花卉はバラングイ・プロファイルの項目に入っていないためここには含めない。

表2 B村における主な商品作物

品目	栽培している人の数 (%)
ココヤシ	42 名 (79%)
果樹	40 名 (75%)
アバカ	37 名 (70%)
バナナ	32 名 (60%)
イモ類	6 名 (11%)
トウモロコシ	3 名 (7%)
花卉	2 名 (4%)

* B村の農民組合員 53 名への質問票調査より、複数回答、具体的な収入は聞き取りできなかった。

表2ではデータの取り方や項目が異なっているが、いずれも同時に複数の作物を栽培していることを示している。

6.1 A村について

① 開拓の過程

A村は、東側の尾根上にある5村のなかで最も早期に人が移り住み、1870年代に村が開かれた。A村に初めてやってきた人はセブ島から渡ってきた土地無し農民だった。A村が開かれた時代は、低地カトリック民がネグロスの山間地に入植を始めた時期と一致する。すでにネグロスの平野部がプランテーション化していたため、山間地に新天地を求めたといわれている [Arnaldo 1954]。彼らはポブラシオンよりもさらに高い場所にある森林を拓いて農地にした。先に示したネグロス小史のなかでも、最も初期に山間地に入ってきた人々に相当する。

早くから開拓されたため、1927年にはすでに土地所有に関する登記がなされた。この時に、軍隊への従軍経験があるなどで英文の登記書類を理解できた者は多くの土地を得ることができたが、文字を読めなかった村人のなかには登記によって土地を失う者もいた。ただし、多くの

土地を得るといっても小規模な在郷地主であり、アシエンダ型の冷徹な地主ではなかった。

村内には、土地の所有をめぐる緊張を緩和するためのゆるやかな慣習法が、自ずと生まれていった。そのため、アシエンダにおける地主と農業労働者のような激しい対立はみられなかった。高地 5 村のなかでは最も人口密度が高く、稠密な土地利用がなされてきた。そのため、均分相続を繰り返した結果、十分な農地を得られない農民も現れ、1940 年代頃から近隣の山間地を新たに拓く者や、より広い土地が存在する農村へ婚出する者もいた。また、マニラへの労働移住が 1950 年代からみられるようになった。

そうした者のなかには村内で農業を続けることに見切りをつけ、1960 年代にはわずかな土地を売ってミンダナオ島の開拓に向かう例もみられた。1960 年代には土地無し農民や小作層にミンダナオ島の開拓に従事させる国家的な政策がとられたからである。この村の人間が入植したミンダナオ西部では、モスリムとの対立に耐えきれなくなってネグロス島に戻ってきた者も多い。

1970 年代には、ドマゲッティ市のための電波塔と貯水池を建設するために村とドマゲッティ市街地を結ぶ道路が舗装された。最近ではオートバイが行き交うようになったが、建設されてから 30 年近くは、村人はその道を歩いてポブラシオンとの間を往復していた。ポブラシオンとドマゲッティの間には戦後すぐにトラックが走るようになっていた。そのため、ドマゲッティで花卉などの露天商をする女性は早朝からポブラシオンまで歩き、ドマゲッティまでトラックで通うようになった。その後、小学校や保健所なども建てられたため、A 村は高地の中心的な役割を担うようになっていった。

② 現在の状況

早くから道路が舗装された A 村では、村からポブラシオンやドマゲッティまで通勤・通学している住民も少なくない。開拓されてからの歴史が長いと、面積に比して人口も多く土地の細分化が進んでおり、現在の土地利用は、バランガイ・プロファイルによると農地が 55%、宅地が 40%、商業地が 10%、工業用地が 10%、施設地が 4%となっている。農地と比較して宅地が多く、農外収入によって生計をたてている世帯が多いことが分かる。土地の項目を合計すると 100%をこえるが、それは、商業地といっても家の一部を利用したサリサリストア（よろず屋）やパン屋であり、家の庭先でのコプラを乾燥しても宅地兼工業地であって、宅地と商業地・工業用地がダブル・カウントされているためである。

1999 年におけるバランガイ・プロファイルには農家世帯という項目があるが、2008 年には農家世帯という表現は消滅しており、それはひとつの世帯のなかでも人によって職業が異なってきたためである。農家のなかには、標高の高い場所にある農地を貧しい世帯に小作させ、自分は自宅近くの農地を借りて小作するという例もある。人口も都市に近い方に集中し、バイクなどの交通アクセスの良い低い所に移り住む世帯も多い。現在の人口は 1,363 人、230

世帯からなり、そのうち農民は150人、村の面積は430haで人口密度は3.1人/haである。男性638人に対し女性725人で、男女差は65歳以下では小さく、それ以上の高齢層で女性が多い。以前はほとんどの世帯にヤシの木に登ってヤシの実を収穫できる男性がいたが、樹冠での作業は登りなれない者にとっては危険で難しいため、農外就労する世帯はココヤシの収穫を専業とする者を雇って収穫してもらうことが多くなっている。収穫人は、ココヤシの木に登って果実を鉋で落として収穫し、殻を割ってコプラを取り出し、仲買人の所までもって行って売る。だいたい年に4回収穫する。収穫人の仕事は、2~3人のグループにより出来高制である。自然落下したヤシの実は慣習的に拾った者の所有物となる。

A村には、それまでの農業によって蓄えた資本によって集約的な農業を営むか、あるいは農外就労の機会を伺いながらその資本で子どもに教育を受けさせようとする者が増えている。これは長年にわたって均分相続を繰り返した結果、限られた土地のなかで生き残りを図るための手段だと思われる。資本に恵まれず、土地もなく、雇用に必要な学歴や資金に乏しい者は、ココヤシの収穫などの仕事に就くことが多い。ココヤシ収穫人は農業労働者といえるが、アシエンダとは違い、雇い手側とはパトロン・クライアント関係ともいえる相互扶助の関係がある。雇用者と被雇用者が同じ村に住んでいるため、単なる雇用関係ではなく、雇用者はフェスタや冠婚葬祭などには人手を得て、逆に被雇用者は病気や葬儀といった緊急時に賃金を前借りするなどの便宜を図ってもらうことができるような関係ができあがっているのである。

③ 農業における変化と農業に係わるプロジェクト

農業面においてもA村とドマゲッティ市との関わりは深い。A村で生産されるコプラは輸出品品であるが、現在の農業収入において重要な位置を占めるのは野菜が最も大きく、次いでバナナや果樹(表1)、花卉となっていて、それらの大半はドマゲッティ市で消費される。野菜の栽培は果樹やココヤシに比べると手間がかかるので、ほとんどの場合、専業農家が営んでいる。バナナも周年出荷できる作物であるが、この村にはそれだけをプランテーション的に栽培する農家は存在しない。販売されるバナナの過半数は料理用バナナである。年間を通して野菜やバナナを販売できるのは、後述するパウナイという市が都市に存在するからである。これに対して、果樹は収穫期に(多くは年に1回、まれに2回)、親族や雇用労働によってまとめて収穫し仲買人に販売する。

果樹はバレンシア町の特産物として売られるランソーネス⁸⁾の占める割合が高いが、ランソーネスは豊凶の差が大きく、また年に1,2回しか収穫できないため、1回の収入は大きくても、それのみに依存して生活するのは難しい。ランソーネスの豊作と不作を分けるのは開花期に降る雨である。開花期に雨が多いと結実せず不作になる。農村での生活にとっては、1回の

8) 学名 *Lansium domesticum*.

収入は少なくとも、年間を通して得られる収入が重要なのである。

1970 年代の地積簿には野菜、果樹、花卉といった区分すらみあたらないので、近年になってそれらの生産が伸びてきたことが分かる。また、かつては商品作物といえ、もっぱらイモ、トウモロコシ、バナナといった自給用作物の余剰と、国際商品作物であるココヤシやアバカが主流であったが、現在では国内の都市で消費される野菜や果樹が大きな割合を占めるようになっていく。

その要因としては、1980 年代にバレンシア町でも政府が“High Value Crop”を含めた野菜の栽培を斡旋したことがあげられる。“High Value Crop”は、キャベツやカリフラワーなど高価格で売ることができる高原野菜を指す。これらは高値で売れる反面、種子や農薬などの経費を必要とすることから、これに参加した農家は、道路へのアクセスがよく、経済的に余裕がある世帯に限られていた。当時、一時的に協同組合も結成されたが、農業技術の習得後は互いを競争相手とみなすようになり、自然解散してしまった。農民組合の存続はプロジェクト主導では難しく、最初に外部から提供された資金が数年で底をつくといずれの組合も解散してしまった。この農民組合の解体は、A 村だけでみられた現象ではなく、近隣山間地農村でも同様の傾向がみられる。

1990 年代には、フィリピン大学や地元東ネグロスにあるシリマン大学によって野菜生産による所得向上プロジェクトが実施された。また 1994 年には、州レベルでの野菜振興策（カサカリサカン）も実施されたが、農民同士の紐帯は弱く、プロジェクトの実施時期が終わったあとも継続することはなかった。

これらのプロジェクトが A 村で集中した背景には、当時最もドマゲッティにアクセスがよく、古くから小学校があったため教育を受けた農民も多く、モデル・ケースとしての事業をおこなうには格好の地域になるとみなされたからであった。プロジェクトの支援を一番必要としている地域ではなく、実施可能性が重視されたのである。先行した農家の成功をみた者が野菜栽培を模倣したことで、後に村内全域に広まっていった。これらのプロジェクトからみえてきたのは、農薬や化学肥料を必要とする“High Value Crop”を大規模に生産できるような資金的余裕のある農民は限られているが、市場と流通が確保されれば、小規模な商品作物の生産は、ゆっくりであっても着実に普及していくということなのであろう。

生産の多様化について生産者の裾野を広げたのは、ドマゲッティ市内にある公設市場やスーパーマーケットに加え、市内で毎週 2 日開かれるパウナイ（*paunay*）という市によるところが大きい（写真 5）。早くから野菜をつくってきた者はバレンシア町やドマゲッティ市の公設市場の店に卸してきたが、これらの者と店の間には、フィリピンでスキと呼ばれる「お得意様」関係が必要である。スキ関係がないと参入は難しいため、後発者はパウナイに頼ることが多い。村人はスキ関係があると定期的に適正な価格で買い取ってもらえるが、収穫が一定しな



写真5 パウナイの様子

い限り、スキ関係はつくるのも維持するのも容易ではないといっている。

セブアノ語でパウナイとは直売を意味する。仲買人を排し農民と個人の客、商店が直接取引する売買形態を指す。この制度ははじめ1997年に州政府によって試行されたが、2006年にバレンシア町が独自にドマゲッティ市の土地を借り上げ、パウナイを始めた。それ以前は、農民は露天商として市の路上で自分たちが収穫した花や野菜を販売するか、村に来る仲買人に庭先価格で安く買い取られることが多かった。パウナイで、売りたいときに売りたいものを何でも売れる状況が、商品作物の作付けを多様化した一因となった。

パウナイでの販売が盛んなA村で栽培されている野菜は、インゲンマメやナガササゲなどの菜豆類、ナス、ニガウリ、トマトなどの果菜類が多い。キャベツやカリフラワーなどの“High Value Crop”も、かつては先駆的な農家がスーパーマーケットやレストランに直接卸していたが、先駆者に追随した農民はそういう販路をもっていないためパウナイで売っている。また花卉も、冠婚葬祭や宗教行事だけでなく、最近ではレストラン、ホテルなどの商業施設や、富裕層のテーブルフラワーとして年間を通して需要があり、都市の経済的な発展にともなった需要の増加により、野菜や花卉の生産の重要性が増しているのである。その結果、自給作が減った分は野菜などを売ってコメを買うという世帯がこの10年で急速に増えていった。稲作地域以外にも急速に米食が増加したため、フィリピン国内での供給が追いつかず、現在では大量のコメを輸入している。

6.2 B 村の場合

① 開拓の過程

B 村は A 村の北に隣接しているが、2 つの村は異なった尾根上に存在し、村間の交流は深いドライクリークで隔てられている。B 村の成り立ちは 1940 年前半であり、第二次世界大戦中に、平野部の戦火を逃れてきた農民によって開かれた。また A 村で相続時に土地の分与を受けられなかった者や、1927 年の土地登記の際に自作地を失った者も A 村から移り住んできた。そのため、A 村の住民と親族関係にある世帯も多く、A 村の子村のような扱いである。小学校や保健センターといった地域の公共施設は A 村に置かれているため、B 村の住民がそれらを利用するには、一旦尾根を下がってから A 村のある尾根を上らざるをえない。移り住んできた当初は自給的な農業をおこなってきたが、1930 年からフィリピン各地で始まったアバカ栽培の波が来た直後であったこともあって、戦後はほとんどの世帯がアバカ栽培にも取り組むようになった。

② 現在の状況

B 村にはまだ森林が残存している。森林が多いのは、標高 800～900 m を超えた山間地と、A 村との間にあるドライクリーク沿いや B 村の北に隣接する別の高地農村との間に流れる谷川沿いの傾斜地である。新たに独立する世帯は残された森のなかや、耕作限界に近い山間地に畑を拓く。B 村は、A 村と同じくドマゲッティ市の近郊にあるが、2008 年までアクセス道路が舗装されなかったため園芸農業の発達は遅れていて、1997 年頃からは日本向けの有機バナナの栽培⁹⁾が盛んになった。

A 村に比べて人口は少なく、195 世帯 864 人で、うち農民は 162 人、村の面積は 533.6 ha で人口密度は 1.6 人/ha、そのうち男性が 478 人、女性が 386 人である。土地の利用区分は農地が 37%、森林が 37%、宅地が 19%、商業地が 7% である。森林は土地の所有が判然としないため、農地を必要とする者は森林地帯に自分の畑を拓いている。

それでも十分な土地をもてない男性は、村のなかでアバカ採取の仕事に就くことが多い。アバカ採取とは、アバカを切り倒し、その偽茎からマニラ麻の繊維を引き抜く作業で、熟練を要する重労働である。アバカ採取人は、引き抜いた繊維を干し、大まかな等級に分けて村内の仲買人やアバカ生産組合に出荷するところまで引き受け、売上高に応じた手間賃を受け取る。アバカ採取人と地主の間には、単に収穫作業を請け負っているだけでなく、ココヤシ収穫人と地主の間にみられたような相互扶助の関係がみられる。

20 代から 30 代の男性と女性の人口を比べると男性の方が圧倒的に多い。その理由として B 村はまだ都市との通勤圏に含まれていないので、若い女性が家事使用人などとして都市で住み

9) NGO を通じ日本の生協などに向けてオルタナティブ・トレードとして出荷されている。

込みの仕事を見つけて移住することが多いためだと思われる。村には、ココヤシの収穫やアバカの採取など男性の仕事は多いが、女性の仕事は少ないのである。

③ 農業における変化と農業に係わるプロジェクト

農業の面において、B村ではサラゴンやトウモロコシなどの自給作物の栽培とともに商品作物としてはココヤシやアバカといった輸出向け作物に依存している時期が長かった。

木材の盗伐が繰り返しておこなわれていた山間地では、1993年に地熱発電所(PNOC)¹⁰⁾の公害保障の一環として、樹木の苗を植えるプロジェクトが3年にわたって実施された。このプロジェクトは樹木の植栽という雇用を生み出し、一時的な現金稼得の機会をつくったが、プロジェクトが終わると山間地での植林や育成の管理は継続しなかった。

PNOCの事業を引き継ぐかたちで、1996年にドマゲッティ市のロータリークラブがドイツ技術協力公社(GTZ)と組んで、果樹の苗の配布や等高線農法などの農業指導、婦人グループを対象にした食品加工といったプロジェクトを3年間にわたっておこなった。ロータリークラブが山間地農村のプロジェクトに乗り出してきた理由には、森林伐採の進展とともにドマゲッティ市内で生じる洪水被害が増加したからである。このプロジェクトには約70名の農民が参加して農民組合を形成した。10年後、不活発ながらこの農民組合には50名の組合員が残っていた。これは、数年で運転資金が枯渇する、ないしは反目しあって消滅することの多い農民組合を考えると珍しい例である。この農民組合が存続したのは、1997年に日本との有機バナナのオルタナティブ・トレードへの出荷が始まったとき、共同出荷が不可欠だったためメンバーの多くがこれに参加したことによる。

だが、バナナやアバカといったバショウ科作物に偏った農業は、バナナの生育を阻害するパンチ・トップ・ウィルス病の蔓延を招き大きな被害を受けることとなった。実際に2000年にはヨーロッパとの間にも、アバカのオルタナティブ・トレードが始まったものの、ウィルス病の蔓延によって2002年にはバショウ科作物の出荷量は著しく減少している。

この状況を改善するために、2003年にバレンシア町が救済に乗り出し、バショウ科作物から果樹・野菜栽培への転換や、バナナの無ウィルス苗の配布などをおこなった。また同時に小規模融資を専門とした海外のNGOからの融資を受ける者も現れた。

2003年以後は行政指導のもと、アバカと樹木や果樹の混作を図ることで、病害発生を抑制を試みている。その後、少量ながら輸出バナナの出荷も再開した。また、道路の舗装にもなってバイクなどの通行が容易になったため、ドマゲッティ市で菓子に使われる商品作物としてのサラゴンを販売する者や、通勤する者も出始めた。2000年以後に増加したランソーネス

10) Philippine National Oil Company (PNOC) は、かつて、エネルギー開発のため各地に公害をもたらした。その後、実際にはっきりとした公害が起きていない地域に対しても、緑化などの公害対策事業への取り組みを国から指導されている。

などの果樹に対しては、収穫期にはビサヤ各地から仲買人が集まるようになった。作付けの多様化だけでなく、販売先や生業も多様化することで収入の安定化を図りつつある。

最近では、バナナやアバカの生産は徐々に回復しつつあるが、過去の教訓から単一作物の作付けを避けるために樹木とアバカの混作といったアグロフォレストリーをバレンシア町が指導している。輸出用バナナに特化していた頃と比べると収入は減少したが、“From Farm to Market Road”と称されたアクセス道路の建設を含め、収入確保の安定化といった点で一定の成果がみられる。行政による包括的な地域への働きかけは、環境や地域社会に一定の効果をあげ始めたといえるだろう。

6.3 C村の場合

① 開拓の過程

C村はタリニス山の西側斜面に位置している。開拓が始まったのはネグロスの森林の多くが商業伐採によって消失した1970年代以降のことで、政府による伐採跡地への入植の振興によって人口が増加していった。平野部で農地を得られなかった人々が、土地を求め流入してくるケースが多かった。1980年代半ばまでは人口も順調に増加し、500名以上の住民がいたといわれている。入植当時の情景は、切り残された森林が所々に残存するものの、多くの場所には、熱帯林の山間地の伐採跡地によくみられるチガヤ類が繁茂していた。

マルコス政権が外国資本による森林の収奪と、その伐採跡地への入植をすすめたことがきっかけとなって村が形成された。その後、民衆の支持によって生まれたはずのアキノ政権の下でも農地解放はすすまず、政策は徐々に民意と乖離がみられるようになった。そうして、山間地が反政府ゲリラの活動拠点と決めつけられ、内戦の舞台となったのである。

このC村はタリニス山の上部に残された水源涵養林と隣接しているため、灌漑施設はつくられなかったものの、湿気が多い谷川沿いには自給用のココヤシが植えられていった。内戦が始まるまでは、伐採会社によって切り残された林や水源涵養林の一部で焼畑耕作がおこなわれ、谷筋で稲作が、そのほかの場所でサラゴンやトウモロコシの栽培といった自給的な農業が営まれていた。ところが、1980年代後半の内戦で村が空爆されてからは、ほとんどの人々が逃散して人口は著しく減少した。

1999年の調査時には、C村民の多くは逃散したままで人口は回復していなかった。当時の農民はチガヤ類が茂る広い草原に点在し、主に自給用のトウモロコシ栽培と肉牛の放牧で生計をたてていた。肉牛からつくる干し肉が主な現金収入源であった。人口は正確には把握されてはいなかったが、200名ほどが広い丘陵地に点在していたようである。2003年以降、再び移住が盛んになり、草地から二次林に戻りつつあった斜面での開拓がすすめられていった。

② 現在の状況

この10年間でC村には、国内難民として流出した人々の一部が帰ってきただけでなく、農

地解放の恩恵を受けられなかった多数の農業労働者たちが平野部から流入してきた。彼らは農業技術や資本をもたず、なんとか食べていくことを目的としていた。2000年代後半にはすでに多くの農民が流入し、1999年に200人あまりだった人口が、2008年には1,235人に増加している。C村は2008年の時点ではまだ政情が不安定であり、他の地域と違ってまだ行政が把握している人口は一部にすぎない。また村の面積も明確には定まっていないが、東斜面のどの村よりも広く、バレンシア町では最も人口密度が低いであろうと推測される。人が立ち退いていた間に、傾斜地には灌木が茂るようになったが、入ってきた人々はその林を次々と切り開いて、あちこちの斜面にカインギン焼畑を広げていった。焼畑でまず栽培するのはサラゴンとトウモロコシなどの自給作物であった。

急斜面に造成した焼畑は土壌浸食や斜面の崩落をいたるところで招いていった。移住者たちは、農業技術や十分な農具すら欠いており、環境を保全しながら農業をする手だてももたず、土地の利用に関して長期的展望をもち得ないでいた。そのことが、新たに得た土地を結果的に荒廃に追いやってしまう状況を招いていた。現在C村では、農民の生活を向上させることにより、政治的にも生態環境的にも安定した地域にすることを目ざして、行政が農業指導とともに教育や保健サービスの導入を強く働きかけている。

③ 農業における変化と農業プロジェクト

1950年頃から政府による伐採跡地への入植が推進され、各地でカインギンによって山間地の農地化が図られたが、C村は山塊の奥まったところにあり、道路も川によって寸断されていたため入植が本格化したのは1970年になってからである。カインギンが違法とされた後も、水源涵養林の開墾は後を絶たなかった。

その後、C村一帯は内戦により長くNPAの支配下にあり、行政的には遺棄され、NGOや一般の人間も容易に立ち入れない空白地帯となった。2003年にNPAと州政府の間に和平合意が成立したことで、山間地を政治的に安定した地域にするための政策が模索され、東ネグロス州でも「*balik bukid*（山へ帰ろう）計画」が実施されることになった。アロヨ政権中においては、NPAだけでなく、ミンダナオ島におけるモロ・イスラム解放戦線との紛争が長期化していた。また民衆によるテロ活動だけでなく、政府側がおこなったと思われる民主運動家への人権侵害も激化した。東ネグロスのそのような状況下で、このプロジェクトはNPAの武装解除と引き替えに実施された。武装解除と併行して農村インフラを整備することで当該地域の貧困問題の解決を平和裏に導き、その結果として平和構築のモデル・プランとなることが期待された[海外農業開発コンサルタンツ2003]。住民生活の安定が政治的安定に繋がると強く意識された政策であった。東ネグロス州では「東ネグロス州タムラン定住促進地域総合開発」を日本のODAの支援を受けて2008年から実施することになり、C村の開発はタムラン定住促進地域の一部に組み込まれた(図3)。

州政府は 2003 年から徐々に周辺地域から移住してきた住民や、かつて NPA に属していた地域住民に、NPA から離反することを条件に居住権や土地の用益権を認めた。実際には、元 NPA 兵士だった者だけでなく、土地が欲しいために元 NPA と偽って入植する者も少なくなかった。

灌漑用施設と、学校の施設、道路建設などのハード面でのインフラ整備がすすめられていった。他の NPA 支配地やミンダナオのモスリム勢力が強い地域で、強権的なアロヨ政権と政治的、軍事的対立を深めている状況をみれば、和平にかなりの面で成功した例だといってよいだろう。

2008 年からはバレンシア町も、農業指導や保健活動、教員の派遣、児童への給食などの住民サービスを開始した。農業指導によって、野菜を中心とした商品作物栽培を振興することで環境破壊的なカインギンに歯止めをかけようとする試みも始まっている。

バレンシア町では現金収入につながる野菜栽培を普及させ、彼らを貧困から脱却させる計画を推しすすめている。2008 年にできた道路を通じ、ドマゲッティ市のパウナイで農民が現金収入を得られるよう技術指導が始まった。また商品作物栽培とパウナイという市場との間を、バレンシア町が借り上げたジプニーによって安価に商品を流通させるようにしたため、自給的焼畑の数は減少した。野菜販売に手応えを感じた農民たちは、自分たちでもジプニーを共同で借り上げることも始めたため、余剰に生産したサラゴンに加え、ハヤトウリやネギなどの野菜をパウナイに売りに来るようになり、その数は年々増加している。2010 年には C 村の自給的カインギンは減少し、商品作物の栽培に効果的にスイッチしつつあるとあってよい。

7. まとめと考察

平野部がサトウキビ・プランテーションに占められていたため、土地をもたない農民は山間地への移住を余儀なくされた。これは A 村が開かれた時代から現在に至るまで、山間地に人が移住する最大の要因である。言い換えれば、山間地で小農による農業生産が展開していった背景には、山間地の土地条件やアクセスの悪さが経済効率を重視する大地主による支配を遠ざけ、森林地帯が利用されずに残った結果、そこがさまざまな小農形態が展開する舞台となったのである。

ネグロス小史に照らしてみると、A 村の開拓期は、平野部が地主の開拓ならびに詐取による大規模なサトウキビのアシエンダ化が展開してゆくさなかであった。セブ島から渡ってきた貧しい農民にとって、自由に耕作できる土地は山間地にしか残されていなかった。B 村の開拓期は、ネグロス島が太平洋戦争に巻き込まれ、平野部に残った農民が戦火による略奪や虐殺をおそれて山間地に逃げ込んだ時期にあたる。またこの時期は、土地登記の問題から所有地を失ったり、人口増加によって十分な土地を得られなかったりした農民が、母村から他の地域に流出

し始めた時期でもある。このような低地からと、山間地での農民の動きによってB村が形成された。C村への最初の人の移住は1950年から1970年の森林伐採期に、政策として森林伐採跡地への入植を促していた時代の末期にあたる。C村は山間地農村の最奥部であり、開拓時期もそれだけ遅かった。その後、政府の力が及びにくい不便な地理的状況が、NPAの戦略地域とみなされる不幸な結果を招き戦闘に巻き込まれた。山間地の内陸側は、マルコス政権時代に政府により入植がすすめられたが、アキノ政権時代には政治的弾圧を受けるなど、政策に翻弄されてきた地域なのである。近年になって政治的安定を取り戻してからは、農地解放の恩恵を受けられなかった人々を受け入れる場所になっている。

各村でおこなわれた農業プロジェクトについては、A村は他の村々の発展を牽引するパイロット事業的な意味合いの強いものが実施されてきた。これらのプロジェクトの主体は行政、大学、民間であったが、いずれの場合も高地の村でも貧困からの脱却が可能であることを実証するという政治的な目論見をもっていた。

B村に関しては、ドマゲッティ市の洪水を防止するための水源林の涵養と併行して、森林や土壌を保護するプロジェクトが中心に始められた。しかしアバカや、オルタナティブ・トレード用バナナといった輸出向けモノクロッピングに偏った作付けが病害の蔓延を招くことになる。この経験は、作物の多様化を図らなければ持続的な発展はないことを山間地の住民に教えるとともに、さまざまな作物や農業技術を提供するためには地方政府などの行政機関が長期的・総合的に関与することの必要性を再確認させることになった。

またC村は、その成り立ちから、山間地（伐採跡地）への人の移動、逃散、村の再構築まで、国策ないしは国策にもとづく政治的介入に翻弄されてきた地域でもある。プロジェクトの多くは国策であり、州のプロジェクトであり、その執行役としての町といった行政機関が何重にも重なりあいながら関与していた。C村での *balik bukid* キャンペーンが成功すれば、全国にある同様の山間地農村における環境負荷の軽減と経済発展をセットにした持続可能な農村開発のモデル・ケースにされていくのだろう。

このようにネグロス島では、山間地は土地無し農民や国内難民の受け皿として重要な役割を果たし、現在もなおその役割は続いている。平野部の大部分は、あいかわらずサトウキビ・プランテーションで占められ、農地解放の歩みは遅い。現在のところ農民に新たに残されている土地は山間地だけなのである。サトウキビ・プランテーションのゆきすぎた展開がなければ、小農による農業が山間地に限定されることはなかっただろうし、沿岸地域と山間地との関係もまったく違ったものになっていたであろう。

東ネグロスにおける山間地農業の特徴をまとめると、海側の斜面では、他の多くの山間地域と同様に、ココヤシがその景観の中心となっている。他地域と異なるのは、ココヤシの高い密度とその林床での複層的な混作体系である。自給的なトウモロコシやサラゴンに加え、さま

さまざまな商品作物がココヤシの林床を覆っている。たとえば、A 村においては商業的な野菜や果樹、花卉の栽培が広くみられ、屋敷地の周辺にはサラゴンを含むホームガーデンが付随している。B 村では、自給用のサラゴンとトウモロコシ、アバカが主体であったが、後にホームガーデンの維持すら危うくなるほど輸出向けバナナやアバカが増加した時期もあった。しかし、それは病気の蔓延を招いて長続きしなかったために、今では自給作に加えてバショウ科作物、果樹や商品作物としてのサラゴン栽培を中心とした混作形態がとられるようになっている。まだ市場との流通が整備されていない C 村のような地域は、ココヤシ林の下に広がる作物の中心は自給用のサラゴンとトウモロコシであるが、将来、流通網が発達すれば A 村あるいは B 村のような変化を遂げる可能性もある。

内陸部では農業や農村自体もまだ発達過程にあるとあってよい。そのため、カインギン焼畑が近年まで続けられてきたが、これは海側の山村が過去に経た道であった。C 村が開かれていった時期にはすでにコプラの商品価値は落ち始めていたため、ココヤシ林は自給用に植えられたにすぎず、村の景観は他村のそれと様相を異にしている。海側斜面では流通の発達にともなって国内販売用の野菜栽培が増え、主食も変わってきたとはいえ、自給用のトウモロコシやサラゴンを生存の基盤とする生活様式に大きな変わりはない。

また、山間地の住民はもともと移住を繰り返しながらさまざまな環境に適応してきた人々であり、商品作物の変化だけでなく、都市での雇用機会といった周辺環境の変化にも敏感に反応する。彼らは山間地農村に居住してはいるが、A 村や B 村で農業を営んでいる人たちと話をしても、次世代は都市での生活も視野に入れながら、山間地での農業だけが生きる道だとは考えていないように感じる。

山間地と都市の関係が深まるにつれ、山間地でも商品作物の栽培が広まり、近年では NGO や行政によるプロジェクトの影響をも強く受け、移住当初の状況とは大きな変貌を遂げた。もともと低地の民であった彼らは、山間地に入っても低地との関係は深く、つねに低地から大きな影響を受け続けてきたのである。

東ネグロス州の山間地という環境は、農業生産においては生態環境の制約が大きい一方、そこに住む農民にとってはアシエンダなどの土地所有やそれにもなる社会的制約が少ない場所である。そこでは、単一の生業にとらわれず、自給作物と商品作物の組み合わせ、農外就労と農業の組み合わせ、またそれらの比重を柔軟に変えながら複合的で多様な生業が営まれてきた。この社会変化に対する柔軟な対応は、今なお揺れ動いている東ネグロスの山間地の暮らしを動的に捉えるうえで重要な視角となる。

また、一般的に山間地の住人は平地と異なる生態系を生かし、山間地に適した農産物を平地の市場を対象として、早くから商品作物栽培に取り組むことが少なくない [鹿野 2004]。東ネグロスでは都市近郊の山間地の農民たちが、生態系の違いを生かしながら都市市場を対象とし

た商品作物の栽培に取り組んできたことが、山間地農村の経済を支えてきた最大の要因である。さらにいえることは、今までは輸出商品作物の生産一辺倒だと思われてきたネグロス島の農業であるが、山間地の農業では都市の成長と連動するかたちで、都市住民が消費する野菜や果樹を提供しながら作物種を多様化させていたのである。山間地の状況はプロジェクトの存在や都市化など平野部のさまざまな動きとつねに連動しており、過去も現在も閉ざされた空間ではない。

山間地のなかにも村による違いや、さらに村のなかでも変異は大きい。たとえばA村では、狭小な土地で集約的な農業に取り組む世帯だけでなく、都市での賃労働から農外収入を得ている世帯もある。B村でも、新たな農地を拓いて農業に特化する世帯がある一方で、都市へ移出する世帯も多くみられる。他方C村のように、森を切り開き農業によって生計を立てるしかない村もある。こうした変異は、単に村の立地、生態環境、市場のニーズ、インフラだけではなく、村の形成プロセスや住民の出自といった歴史的な要素も複雑に絡み合いながらつくりだされてきた。そして、生活様式や生業形態がさまざまに変化しても、サラゴン、バナナ、ココヤシ、トウモロコシそして魚を基本とする食習慣は、政治や経済の動きに翻弄されてきたビサヤ地方の生活を根底で支えてきた。それは山間地でも基本的には同じであったとってよいだろう。

本研究では、ネグロス島が“Sugar Land”という側面だけでなく、平野部の都市化に同調しながら山間地の多様な生活と農業がつくり上げられてきたことを明らかにした。こうした変容のプロセスは、有望な資源である山間地を [トムボック・ギリエン 1992]、将来どのように活用してゆくかを構想するうえでの基礎資料となるだろう。ただし、多雨地域であり、急峻な地形からなる山間地で農業をおこなうということは、表土の流出など深刻な土壤劣化を引き起こし、土地の収奪につながりかねない [田中 1997: 137-141]。フィリピンでも山地の土壤浸食は大きな環境問題となっていて [Callanta 1998: 57-59, 62; 梶尾 1998]、とくに毎年台風が襲来するビサヤ地方ではそのリスクはさらに高い。経済が偏重される昨今、山間地の開発はきわめて慎重にすすめられるべきであり、環境保全に対して行政が果たすべき役割はますます重要になってきている。

謝 辞

この研究は国際交流基金、日本学術研究振興会、GCOE 生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点、大学院教育改革支援プログラムから助成を得ておこなった。また、調査に協力してくれたバレンシア町の住民の皆さん、バレンシア町役場に深く感謝します。常にくじけそうな私を励まして下さった指導教官の小林繁雄先生や相談に乗っていただき議論や指導をしていただいた副指導教官の伊谷樹一先生に対しては感謝の念にたえません。また非常に懇切丁寧な指摘やアドバイスを下さったお2人の査読者のご指導に、心より感謝したいと思います。

引用文献

- Aldecoa-Rodriguez. 2001. *Negros Oriental and Marilia Low 1972-1981 Negros Oriental from American Rule to the Peasant: A History the Republic Period* 2(3). Tokyo: The Toyota Foundation.
- Arnaldo, M. V. 1954. A Study of Cost Production of Corn by Tenant Farmers and Small Farm Owners in the Mountain Village of Bongbong, Valencia Negros Oriental, *Silliman Journal* 1(2): 41-64.
- Berlow, A. 1996. *Dead Season: A Story of Murder and Revenge on the Philippine Island of Negros*. Maryland: Commonweal Foundation, Inc.
- Cadelina, V. R. 1985. Silliman University Research Action Development Program in the Upland: The Lake Balinsayao and the Negrito Upland Sites, *Silliman Journal* 32(1-4): 1-7.
- _____. 1986. *Faces of Philippine Poverty: Four Cases from the Visayas*. Cebu: Visayas Research Consortium, Philippine Social Science Council Press.
- Callanta, S. 1988. *Poverty: The Philippine Scenario*. Manila: Bookmark.
- Fernholz, M. R. 1998. *Sustained Farmer Participation in Social Forestry: Case Study in the Philippines (Forestry)*. Massachusetts: Harvard University Press.
- 古川久雄. 1997. 「フィリピンプランテーション」古川久雄・海田能弘・山田 勇・高谷好一編『事典 東南アジア』弘文堂, 482-483.
- Gervacio, E. T. 1959. *Livelihood of Corn Farmers: Farm Management Study of Negros Oriental*. New York City: Council Economic and on Cultural Affairs Inc.
- 橋本征二. 2002. 『海を渡ったタロイモ』関西大学出版.
- Hoffman, S. E. 1982. The Forest Frontier in the Tropics: Pioneer Settlement and Agricultural Intensification in Negros Oriental, Philippines. In K. L. Hutterer and W. K. Macdonald eds., *Houses Built on Scattered Poles: Prehistory and Ecology in Negros Oriental, Philippines*. Cebu: University of San Carlos, pp. 53-84.
- 海外農業開発コンサルタンツ. 2003. 『東ネグロス州タムラン定住促進地域総合開発』プロジェクトファインディング調査報告書. 海外農業開発コンサルタンツ.
- 梶尾昌秀. 1998. 『自然を読み—東南アジアの森』ゼスト.
- 加藤 薫. 1998. 『大洪水で消えた街—レイテ島, 死者 8 千人の大災害』草思社.
- 鹿野勝彦. 2004. 「アジアの山地民の生活世界と地域環境」『地学雑誌』113(2): 251-257.
- LMC. 2010. *March Quarterly Statistical Update*. London: LMC International.
- 永野善子. 1986. 『フィリピン経済史研究』勁草書房.
- _____. 1990. 『砂糖アシエンダと貧困』勁草書房.
- 日本ネグロス・キャンペーン委員会編. 2000a. 『耕す人びとに希望はあるか—フィリピン農地改革の現場から』日本ネグロス・キャンペーン委員会.
- _____. 2000b. 『民衆農業は砂糖の島を変える』日本ネグロス・キャンペーン委員会.
- National Statistics Office. 1991. *Census of Agriculture Negros Oriental*. Manila: National Statistics Office.
- _____. 1996. *Philippine Statistical Yearbook*. Manila: National Statistics Office.
- _____. 2002. *Census of Agriculture Central Visayas*. Manila: National Statistics Office.
- 大河原哲. 2007. 「サカダーフィリピン糖業の奥底から—ネグロス島砂糖農園で働く人々の階層構造」『季刊 [あっと] at』7: 55-73.
- Olasion, G. E. 1985. Negrito Farm Productivity and Food Deficiency: Implications for External Intervention on Upland Agricultural Management, *Silliman Journal* 32(1-4): 17-31.
- Provincial Planning and Development Office. 2008. *Provincial Development and Physical Framework Plan*

- 2008-2013. Dumaguete: Planning and Development Office.
- Romero, J. A. 2008. *Transforming the Coconut Industry: Institutional and Policy Reforms toward Shared Development*. Quezon City: Central Book Supply, Inc.
- 関 恒樹. 2003. 「フィリピン・ビサヤ民族社会における力・主体・アイデンティティに関する予備的考察—dungan の概念について」『アジア社会文化研究』4: 105-121.
- _____. 2007. 『海洋世界の民族史』世界思想社.
- Sitoy, V. T. 1993. The Making of Negros: A Brief History. In Sitoy ed., *Kabilin Legacy of Hundred Years of Negros Oriental*. Dumaguete: Negros Oriental Centennial Foundation, pp. 1-16.
- 田中 明. 1997. 「人為的土壌劣化」田中 明編『熱帯農業概論』築地書房, 137-141.
- トムボック, C. C.・S. A. ギリエン. 1992. 「山間農地生態系における環境問題—フィリピンの経験」『東南アジア農業と環境保全』日本大学農獣医学部国際地域研究所, 119-151.
- Rosario, E. 1999. Final Management Plan of the BAYAWAN-BASAY Watershed Negros Oriental. Prepared by the Philippines for the IFCS Meeting on POPs (June 1996). In E. Rosario and Multidisciplinary eds., *Dumaguete: the Philippines for the IFCS*, pp. 1-20.
- Provincial Planning and Development Office. 2008. *Provincial Planning and Development and Physical Framework Plan 2008-2013*. Dumaguete: Negros Oriental Provincial Planning and Development Office.
- 梅原弘光. 1983. 「風土と地理」石井米雄・綾部恒雄編『もっと知りたいフィリピン第2版』弘文堂.
- _____. 1992a. 『フィリピンの農村—その構造と変化』古今書院.
- _____. 1992b. 「地理」『フィリピンを知る事典』同朋舎, 1-3.
- Valencia Municipio Office. 1998. *Valencia Municipio Profile*. Valencia: Valencia Municipio Office.
- VanderMeer, C. 1962. *Corn on the Island of Cebu the Philippines*, Ph.D Dissertation Paper, Michigan: University of Michigan.
- Wernsted, F. 1954. The Role of Corn in the Agricultural Economy of Negros Oriental, *The Silliman Journal* 1(1): 59-67.
- Wollenberg, E. 1991. *Urban Markets and Rural Resource Productivity: Incentivizes Soil Conservation among Upland Farmers in the Philippines*. London: The London School of Economics and Political Science.
- 山本宗補. 1991. 『ネグロス—嘆きの島』第三書館.